

県P連会長・県校長会長との対談



(対談者)
長崎県校長会長
長崎県PTA連合会会長

高坂 英晃氏 (長崎市立梅香崎中学校校長)
松本 光生氏



(進行者)
長崎県PTA連合会副会長

田崎 飛鳥氏

県校長会とは

田崎 本日はよろしくお願ひします。まずはじめに、県校長会とは、どんな団体ですか？また、何をしている団体ですか？

高坂 長崎県の公立小中学校の校長を会員とする教育関係団体で、今年の会員は455名です。小中学校の教育の充実に図るために協働して研究と実践を重ねている団体です。

松本 どんな研究をされているのですか？

高坂 今の小中学校の教育活動の課題について研究を行っています。

今年度は五つあって、その一つが生命を尊重する教育の充実です。例えば、コロナ対策。また、それに伴って不登校傾向の子どもが増えているので、その対策などです。特別支援教育もこの課題に含めています。

二つ目が、学習指導要領の趣旨と時代背景を踏まえた教育の充実。これについては、GIGAスクール構想の展開や部活動の地域移行、学力調査をもとにした学力向上などがあります。

三つ目は、社会に開かれた教育課程とカリキュラムマネジメントの推進。PTA活動とも少し関連があるかもしれません。

学習指導要領の「より良い学校教育を通じてより良い社会をつくる」という目標にそって、じゃあ社会に開かれた教育課程というのはどういうものか、それをどうやって推進していくかという研究をやっています。

四つ目が、働き方改革の推進。それから、教職員の処遇改善、少人数学級実現というのが四本目の柱になっています。なかなかブラックな職場と言われていますから……。

松本 最近、よく言われていますね。

高坂 そうですね。それで、魅力ある学校づくりのためにはどうしたらいいだろうかとか、それぞれの教職員の持ち味を発揮できる職場環境づくりとはどういうものかとかですね。

最後の、五つ目は、私たちが生涯磨いていく必要がある教師力の向上ということで、教職員の資質能力向上と研修の充実というのが柱となっています。

教師の魅力

松本 今、一番大きな課題といったら何ですか？もちろん全部が課題ではあるんですけど。

高坂 そうですね。さっき言った五つの柱の全部に共通した課題といえば、人手不足、人材の育成ですね。

松本 そうなんですか。

高坂 はい。人手が足りないっていうのが、生命尊重の教育、学習指導要領に沿った指導、それから、教職員の処遇改善、働き方改革だって、全てにわたって人手不足が課題になってきますね。

松本 そうなんですか。それで何か、光が見えるものがあるんですか？

高坂 うーん。やっぱり教育委員会との連携がどうしても必要になると思います。学校は学校で、魅力を発信していかなくちゃいけないでしょうけど。

たとえば今、教員になりたいという大学生が少なくなっているということがあります。

松本 なるほど。先生のなり手不足というのは、最近大きく報道にも出ていますよね。どうして、先生のなり手が少なくなってきたのか、とても気になるんです。

その原因の一つに、保護者との関係があるのではないかと思います。もしかしたら、PTAとして、そこをどうにかしてフォローできないかと思ったりもしているのですけど。どうですか。

高坂 もしかして、あちよつと面倒くさいなあと思っている学生もいるかもしれませんけど。

でも、私はそれ以上に、憧れや夢を抱く対象が広がっていることも大きいと思っています。

松本 なるほど、そうなんですか。

高坂 ユーチューバーなんてのは、まさにそうだと思いますね。時代の流れて、憧れる職業や生き方が広がっているような感じはしますね。

松本 なるほど。じゃあ、一概に負の連鎖で、教員のなり手不足に陥っているというわけではないかもしれませんね。どうしても、ブラックイコールなり手不足、なお且つ、拘束時間だけでなく精神的にもつらい部分があつて……。

報道されるのは、精神的に病んだ先生が学校を休んでいるとか、マイナスの情報が入ってくるので、なりたくないだろうな、きついんだろうなというイメージがでてきますけど。

それは別に、情報化社会になって、子どもたちが夢を抱く場所が多くなったということもありますね。

高坂 私は、そう思いますね。

松本 今、何かになりたいと調べたら、どういう道をたどればいいか出てきますよね。

高坂 そうそう。感動体験って、私たちの時代も今の子どもたちもそんなに変わらないと思います。一つの学校行事があつて、学級でやって燃えて楽しかったとか、お別れするときにとっても寂しくて涙がいっぱい出たとか、そういう体験は全然変わらないと思うんですけど。じゃあ、そこで感動するから学校の先生がいいとは簡単にならないところがあるんじゃないかと思っています。

松本 ということは、他の職種、職業の方たちに勝るぐらい先生の魅力を発信していかないと、なり手不足は解消されないということなんですか。

高坂 教育実習を体験すれば、ああ、やっぱり教員っていいなあ、学校の先生っていいなあと思う学生さんは非常に多いと思うんですけど。そこにたどり着くまでがなかなか難しいところがありますね。

松本 ちなみに、先生の魅力って何ですか。

高坂 やっぱり、仕事で感動が得られることだと思います。まあ、他の仕事にもあるのかもしれないんですけど。その、仕事で感動して涙するっていう機会を得られる職って、そんなにないんじゃないかと思うんです。

松本 なるほど、確かに。

高坂 たとえば、九の苦しみがあつても、その一つの感動があれば一生やっていけるというか、そういう職だと思うんです。

松本 どうしたら、そんな魅力を発信できるんですかねえ。

高坂 そうですね、小学生や中学生、高校生に対して、先生の魅力を発信できる機会を増やしていくとかですかねえ。大学に行く前だと思うんです。

松本 そうか、大学は、教育学部をめざして行くから。

高坂 本校で、田崎副会長に話してもらった職業人講話を、教員がはじめに子どもたちにするというのも一つの手かもしれませんね。

松本 田崎副会長、ちゃんと話せた？

田崎 楽しくお話をさせていただきました。

高坂 お話が終わった後、質問はありませんかと言っても、ふつうは出ないですよ。でも、次から次に当たりますよ。

松本 そうなんですね。それは嬉しいね。

ところで、先生という職の魅力をアップするためにも、保護者と先生のつながりをよくすることが大切だと思んですが、どうでしょうか。

高坂 そのとおりですね。

保護者と先生がつながる学級PTA

田崎 保護者と教師のつながりをよくするためには、どうしたらいいと思いますか？

高坂 何かやはり共通の目標をもって、その目標に向かっていくことが一番大切かなと思っています。保護者の願いがあって教師の願いもある。それぞれの共通の願いのなから目標が見つからないだろうか。それが見つかったら、協働していくことでつながりが強くなると思うんですね。

協働って言っても、保護者と教師がいつも一緒に同じことをするというのではなく、共通の目標に向かって保護者ができること、教師ができることという役割を明確にして、それぞれの長を生かしながらやっていくのが大事だと思います。

松本 共通の目標ですね。共通というと、そこに子どもがいるというのが一つの共通点になってくると思うんですけど。

高坂 そうですね。やっぱり子ども中心がいいんじゃないですかね。そのためのお互いの学び直しとか、お互いの学習を深めていくということであって、いいのかもしれないけど。

松本 なるほど。

高坂 たとえば、情報化社会に正しく、うまく付き合っていくというお互いの願いがあったとき、じゃあ教師にできることは、学校で情報教育を一生懸命やっ

ていく。一方で、保護者はスマホとかSNS、ネットを使うときのルールづくりをやっているというような役割分担をして。

でも、それぞれが役割を果たすためには、まだまだ勉強不足だから、共通の研修の機会を設けてお互いに受講してみようとか、自分たちが取り組んだことについて情報共有をしてみようとか、一つの目標に共通して向かっていけば、つながりとかつながる意義とかは理解されていくと思います。

松本 なるほど。

ちょっと話はずれるかもしれませんが、先生方にとって

PTA、保護者とながら
メリットはあるのでしょうか。

高坂 先ほどの例で言うと、ルールづくりは、保護者と子どもさんがやった方がいい。こんなルールにしない、あしなさいっていうのを学校で全て完結させるのは難しいところがあります。やっぱり、PもTも必要になってくると思います。

松本 ということは、

PTAとしてやらなきゃいけないことは、保護者の皆さんに、先生方はこういう思いだから一緒に話をしましょうよっていうアプローチをしていくこと。そうすると、どちらもウィンウィンになりますね。

高坂 そうですね。

(途中、省略)

松本 私は先生とお話していて、先生と保護者がつながりをもつことが子どもたちの将来にとってプラスになると、すごく感じました。正直なところ、保護者は先生方とつながりたいと思ってるけど、先生方は、本当につながりたいと思ってるのかなという



のがありました。

でも、先生とお話して、

やはり子どもを健やかに成長させたいという共通の目標があって、そのためには先生方も保護者に協力してもらいたいと思ってる。だから、つながらなければいけないんだということがよく分かりました。そこで、どうしたら密につながれるのかと考えたとき、学級PTAを充実させることが一番だと思うのですが、どうでしょうか。

高坂 いいと思います。話がより具体的になると思います。

松本 昔のことを言ってあれなんですけど、母が学校に行くと先生と話して帰ってきたとき、「あんなのことをこがん言いよったよ」とか聞いて、それだけで何か笑顔になっていたような気がするんですよ。

学級懇談会、学級PTAを充実させるだけで、保護者と先生の距離が近くなるって言うだけでなく、子どもの笑顔にもなっていると感じます。

高坂 もちろん、そうだと思います。

松本 学級PTAって、実は先生だけが考えているところが多いんじゃないかという反省がすごくあります。会長さん方も、学級PTAはPTAの行事という認識が無い方が多くて。我々の保護者へのお知らせが弱かったために、先生方にお任せになっているんじゃないかという反省をしています。そこで、県P連から各都市町PTA連合会を通じて単Pの皆さんへ学級PTAを充実しましょうという声かけをしていきたいと思っています。

それで、先生方からも学級懇談会、学級PTAを充実しましょうと保護者のみなさんにお声掛けをしていただいて、両方から言っていきたいと思うのですが、どうでしょうか。

高坂 学級PTAって、つながりのスタートとしてはとてもいいと思います。各論を協議できるような会を大事にするというのが、PTAではとても大切だと思うので……。

(中略)

松本 そして、そのためには打合せがいりますね。ということ、担任の先生に「今度、どうします

か」という一声をかけてもらうように県P連の生動を通して周知していきたいと思えますし、校長先生方からも担任の先生に「学級役員さんに今度どうしますかと声をかけてください」と伝えてもらうというのを双方向でやっていきたいですね。

高坂 そうですね。まさにそれが、共通の目標に向かって、それぞれができることをしっかりやっていくことにつながるんじゃないかと思えますね。

松本 いや、何かヒントが見えてきました。私たちとして現場に対して何ができるのかなと思っていて、つながるためにも、私たちの方から先生方に一声かけなければならぬ。また、先生方にもお願いして、一声かけてもらえないだろうか。歩み寄って一つの方向性を話し合っていくことなんですね。

高坂 積極的に保護者にコーディネートしてもらおうよというのを、私たちがしていけばいいですね。校長会。

松本 そうですね。それを県P連の立場と県校長会の立場から、現場に言っていくことが、子どものため、保護者のためになっていくと思います。

(途中、省略)

松本 私は、先生とお話して強く思ったのは、長崎県は全国で一番学級懇談会が充実している、学級PTAが充実しているという県になると、それだけで現場は盛り上がるというか、課題に対して直面できるんじゃないかということです。ですから、校長会と手を取り合って「お互い声をかけようよ」ということを言っていく。「それが、学級懇談会、学級PTAの充実につながるんだよ」と。

保護者と先生がつながれば、問題の早期発見、早期解決につながるし、子どもたちの夢の実現に直接することが分かったので、ぜひ、連携させていたいただきたいと強く思っています。

高坂 そうですね。そう思いますね。

田崎 よろしくお願います。

ありがとうございました。